

特集

イエローグリーンキャンペーンについて

宮城県イエローグリーンキャンペーン推進会議の
発足と取り組み宮城県医師会環境保健委員会委員長
東北大学環境・安全推進センター教授・統括産業医

黒 澤 一

はじめに

喫煙は肺がんや慢性閉塞性肺疾患（COPD）などの呼吸器疾患の原因になるとどまらず、全身にわたる臓器の甚だしい数の疾病の原因であり、病状を悪化させる要因である。のみならず、喫煙しない周囲の人間やペットにまで健康被害を及ぼす。加えて、失火や子供の誤飲などの事故の原因でもある。喫煙者には自死が多く、交通事故や労働災害が多い。これらの損失額計は、税収やタバコ関連産業などの経済効果をはるかに上回ると試算されている。ニコチンは催依存性が強く、数本のタバコでたちまちニコチン依存が成立する。禁煙外来は保険適用となったが、その際の傷病名はニコチン依存症である。喫煙は、ニコチンに対する欲求衝動をみたすために行う行為であり、依存が禁煙を難しくしている。医学界や厚生労働省は喫煙をやめること、しないことの大切さを訴えてきた。最新の広辞苑では、嗜好品の例示からタバコは削除された。嗜好品から依存性薬物への常識の変化を示す象徴的な改訂だ。

一方、国民のタバコの認識は正しく変わったのか。昭和の時代の嗜好品としての考え方、タバコ広告によって植え付けられた不適切な認識、文化としての喫煙の幻影、そのようなものが根強く存在している。非喫煙者の増加により、全く無関心の人も増えている。喫煙率は年々低下しているというものの、わが国の喫煙総人口は千万人の単位を維持している。宮城県の喫煙率は全都道府県の中でも上位にある。宮城県民のタバコに関する正しい理解と関心を広げていくにはどうしたらよいのか。

今回、宮城県医師会を中心に宮城県イエローグリーンキャンペーン推進会議が組織され、世界禁煙デーにむけたキャンペーンとして種々の啓発活動や禁煙週間のライトアップを2024年から行っ

てきた。本稿では、その発足の経緯と取り組みについて紹介したい。

1. アウエアネス・リボン

アウエアネス・リボンは社会運動や社会問題に対してその着用者がさりげない支援や賛同の意思を示す方法として使用されるもので、リボンあるいはその絵を描いたバッジや絵などを用いる。リボンの色に意味が託される。ピンクリボンは乳がんの予防と啓発、レッドリボンはHIVの啓発、などが知られる。慢性閉塞性肺疾患（COPD）の世界的な活動であるGOLDの一組織である「一般社団法人GOLD日本委員会」では、COPDの啓発の意味を込めて金色のリボンを模したバッジを配布している。

2. イエローグリーンリボン

受動喫煙防止の啓発に関するリボンの運動は、1999年に海外に起こり、色はブルーであったらしい。日本で色がイエローグリーンになった経緯は、長崎県佐世保市の市民の意見が始まりだという¹⁾。佐世保市では、健康増進計画である「けんこうシッパさせば21計画」を2002年に策定したが、この際にタバコ対策を担当した班から意見が出て、アウエアネス・バッジが提案された。バッジの色が黄緑（イエローグリーン）色になった理由は、他の運動で使用されていない色で、爽やかなイメージだから、らしい。

佐世保市のホームページをみると、「黄緑色のリボンを見たら「タバコ」を近くで吸わないでね」との記載が見える。「たばこの煙を吸いたくない」という気持ちをさりげなく周りの人に伝えるためのもの、との位置づけだ²⁾。現在でも、イエローグリーンシールが同市の健康づくり課で配布されている。

イエローグリーンキャンペーンについて

特集

3. イエローグリーンライトアップ

毎年5月31日は世界禁煙デーである。わが国でも各地で関連イベントが毎年開催されており、5月31日から1週間は禁煙週間とされる。日本の世界禁煙デーイベントとしてイエローグリーンライトアップが行われたのは2015年の京都タワーなどが最初らしい。色が黄緑になった経緯は佐世保とは違った経緯であったが、以後、各地でライトアップが散発的に行われるようになった。2020年に福島で開かれた第14回日本禁煙学会総会では、地域の組織や団体を巻き込み、全県的な受動喫煙防止を前面にしたキャンペーンを展開した。福島での一大ムーブメントが背景となり、2022年に日本医師会がトップダウンでイエローグリーンライトアップの実施を全国の医師会に呼びかけ、2023年の世界禁煙デーで各地の医師会を中心として、ライトアップの取り組みが行われるに至った。宮城でも、宮城県医師会館、仙台市医師会館、仙台放送電波塔、仙台市医師会看護専門学校、白石城天守閣、角田市台山公園内のH2Aロケット実物大模型、等々が夜空にイエローグリーンの光を放った³⁾。

4. 環境保健委員会における提案

県医師会の環境保健委員会は、研修会を開催することが主な事業の1つであり、最近では、毎年のように、東北大学の押谷教授らを講師に招いて、新型コロナウイルス感染症についてのシリーズ的な研修会を開催していた。2023年度では、7月19日に第1回の委員会が開かれ、例年どおり研修会の企画が決められた。席上、イエローグリーンライトアップを積極的に推進してはどうかと委員の松永弦先生から発言があった。2023年は医師会の取り組みで、広がりには限定的であったため、宮城県民にもっと広く訴えるようなキャンペーンができないか、という趣旨だった。安藤由紀子先生をはじめとして、委員の先生方はその推進に意欲的であったし、委員会には佐藤和宏会長、奥村秀定副会長、佐々木悦子担当常任理事、登米裕也担当常任理事の役員の方先生方も同席されており、この件、前向きに検討することに同意をいただいた。少し時間をもらい、第2回委員会を10月13日に開催し、その実

施を決め、活動方針や具体的な内容などが話し合われた。何かを始める際には、大義名分を明らかにしなければならない。趣意書を兼ねた提案書案の作成を委員長である筆者が担当し、佐藤和宏会長宛に提出した。形式に整えられた趣意書は医療関係の種々の団体に送られ、参加が呼びかけられた。

5. 趣意書の内容

宮城県医師会は、平成30年7月1日に禁煙宣言をした。医師会として、タバコの煙とニコチン依存症の害を広く啓発すること、すべての人の受動喫煙の健康被害を防ぐこと、すべての喫煙者の禁煙への取り組みを働きかけること、禁煙を率先して実践すること、などを明確に打ち出している。イエローグリーンキャンペーンは、まさに禁煙宣言を具体化した活動の1つと位置付けられる。趣意書では、宮城県医師会が種々の団体や組織と連携し、率先して積極的に本キャンペーンを推進していくことを打ち出し、2024年5月31日の世界禁煙デーに向けて関係団体に広く参加を求めた。

6. 宮城県イエローグリーンキャンペーン推進会議の発足

幸い、各団体から参加表明があり、「宮城県イエローグリーンキャンペーン推進会議」は発足した。2023年12月4日、その第1回会議は宮城県医師会館およびWEBのハイブリッドで開催された。参加者は県医師会および仙台市医師会の他、東北大学医師会および東北医科薬科大学医師会を含む郡市医師会、宮城県、仙台市、宮城県歯科医師会、仙台市歯科医師会、宮城県薬剤師会、仙台市薬剤師会、宮城県看護協会、宮城県産婦人科医会、宮城県栄養士会、NPO法人禁煙みやぎ、宮城県結核予防会、株式会社バイタルネット、河北新報社、等々の代表者であった。2024年の推進会議は計4回、回を重ねて開催された。2025年にも推進会議が継続され、計2回会議が開催された。参加団体は拡充されている。

7. キャンペーンの内容

1) ポスター・チラシの作成

ポスターデザインは安藤先生が主導して外部に

特集

イエローグリーンキャンペーンについて

依頼し、いくつかの案が推進会議に提出された。日本医師会のキャラクターである「日医くん」を登場させる案もあったが、各参加団体が横並びで組織する推進会議であることをふまえ、不採用とした。採用したデザインは、イエローグリーンリボンを大きく中央に据えて、人々の楽しそうなくらしを描くイラストで周囲を飾ったものだ(写真1)。大きなサイズのポスターの他、同じデザインのA4サイズのチラシも作り、各参加団体に配布した。ポスターはいろいろなところで貼られている。薬剤師会に配られたポスターは調剤薬局でみることができたし、宮城県に託されたポスターはイエローグリーンリボンを身につけた「むすび丸」とともに県庁舎のエントランスに飾られた。2025年の推進会議でも同じデザインで2024の文字を2025としたポスターとチラシが作成され、さらに多くの街角のあちこちの場所で見かけることとなった。



写真1

2) イエローグリーンリボン

リボンの簡単な作り方は、先行した福島県いわき市のHPを参考にし⁴⁾、推進会議でも紹介した。

2024年には、金属製のバッジも作成した(写真2)。単価が300円ほどということで、参加団体に十分な数を配る数にそろえるには高額となるため、参加団体が個数を希望し、実費を負担しあうこととした。イベントなどで関係者が集まる際に身につけた同士であれば連帯感が生まれる。それは何のバッジかと聞いてくる人もいた。「赤い羽根」のようにその意味が知れ渡っているわけではない。筆者の場合、せめてということで、禁煙に関する講演などの際、スーツの襟にバッジをつけて無言のアピールをすることにした。ネクタイもポケットチーフも老眼鏡のメガネケースもイエローグリーンという念の入れ方である。



写真2

3) ポケットティッシュとストラップ

グッズの作成は松永先生に主導していただいた。ポスターデザインをモチーフにしたポケットティッシュと小さな缶バッジに紐をつけたストラップも作成した(写真3)。用途は各参加団体におまかせだったが、調剤薬局などで薬をもらいにきた患者さんに配ってくれたりしていた。東北大学病院には1,000個が割り当てられ、広報を通じて病院のモールに置いてもらって患者さんに届くようにしてもらったり、各職場に配布したりして喜んでもらった。「世界禁煙デー」との認識を広めるには、役に立ったと思う。筆者はストラップを

イエローグリーンキャンペーンについて

特集

1個わけてもらい、普段使用しているバックパックに飾り気がなかったので、ぶら下げてみた（写真4）。携帯電話のストラップに使っている人もいるようだ。



写真3



写真4

4) ホームページとSNS

昨今、何をするにしても、ホームページとSNSは重要な意味を持つ。委託して業者に作成してもらうことも考えたが、それなりのお金が必要だ。あまり得意ではなかったが、まず、ホームページ

を見様見真似で作って、筆者の教室のサーバーにアップロードしてみた⁵⁾。急造でデザインはいかにも素人だが、仮のホームページのつもりだった。だが、現在もそのホームページは維持され、検索すると真っ先にヒットするページとなった。ささやかながら、外部から検索した場合、宮城で確かに本キャンペーンが行われていると認識されるのに役立っているようだ。問い合わせもいくつか来るが、なぜか、関西方面からが多かった。宮城の事例を紹介する講演依頼が1件あったが、本ホームページを見て、ということだった。

SNSはFacebook, Instagram, Xにアカウントを設けたが、広がりには残念ながら限定的だった。2025年には、担当常任理事の岡村智佳子先生のご尽力もあって、YouTubeチャンネルが設けられた。推進会議で動画コンテンツを募集し、いくつかチャンネル内でみることができる⁶⁾。

5) イベント

NPO法人禁煙みやぎは推進会議の参加団体であり、理事長である山本蒔子先生が積極的に会議に参加しており、法人の事務局は安藤先生が担当している。筆者も会員の1人であり、法人が主催する世界禁煙デー・宮城フォーラムとの連携は、自然の成り行きだった、ともいえる。

2024年の第30回フォーラムには、イエローグリーンキャンペーンについてのシンポジウムが企画され、筆者が座長となり、宮城県医師会の佐藤和宏会長、仙台市医師会の安藤健二郎会長、宮城県歯科医師会の細谷仁憲会長、宮城県薬剤師会の金田早苗副会長がシンポジストとして登壇した。主要各参加団体のトップが名を連ね、宮城県の本キャンペーンにかける思いの本気度が示されていたと思う。

2025年の第31回では、福島での禁煙学会での実行委員長であり、日本医師会においてもイエローグリーンキャンペーンを主導する福島県のいわき市医師会長齊藤道也先生が「全国で推進される受動喫煙対策～イエローグリーンキャンペーンは条例制定の好機となるか」と題した基調講演を行った。齊藤先生には会後の懇親会にもおいでいただき、プロスポーツとの連携や通年の活動形態な

特集

イエローグリーンキャンペーンについて

ど、非常に有意義なアドバイスをいただくことができた。

6) イエローグリーンライトアップ

イエローグリーンライトアップの簡便なやり方については、蛍光灯に耐燃性のカラーフィルムを巻き付ける方法をホームページに示した。すでに宮城県医師会では、2023年にライトアップを実施しており、その方法を参考にしたものである。フィルムは黄色と緑を重ねると黄緑になる。2023年の実施写真をみると、仙台市医師会館のライトアップは黄緑の光だが、宮城県医師会館のライトアップは緑色である。3月に世界緑内障週間があり、緑内障の啓発目的に緑色のライトアップを行っている関係だろうか。とにかく、緑でも黄緑でも、ライトアップを行ってもらうことが重要で、厳密な色にはこだわらなかった。

フィルムでやる方法のほか、米谷則美先生は会議席上で実物をもって安価なLEDライトを用いる方法を紹介してくれた。投光器を用いる方法を採用したところもあり、場所に応じて可能な方法でライトアップが検討されている。

結果として、世界禁煙デーの夜に、本当に多くの施設や場所でライトアップが行われた。正確に数えたわけではないが、2024年に多く実施していただいた上⁷⁾、2025年には雨模様で確認しに行けなかったが、さらに多くの箇所でライトアップが行われたと思う^{8,9)}。青葉山の伊達政宗騎馬像や大年寺山のテレビ塔などはシンボリックな役割をした。飲食店2軒でも協力をいただき、そのうちの串焼き居酒屋さんでは、店内の黄緑色のライトを見て、来客たちが何事かと話題にしていた。

7) マスコミとの連携

河北新報社は当初から会議に参加していただいた上、紙上およびオンラインの記事を写真つきで掲載いただいた。伊達政宗騎馬像のライトアップのカラー写真は、人目を引きつけるものだった。仙台放送および宮城テレビはテレビ塔のライトアップと関連報道、東日本放送は世界禁煙デーの取り組みの放送などでご協力いただいた。東北放送はご協力の意志を表明していただいていたが、残

念ながら、テレビ塔のライトアップは難しいとの結論だった。照明がLEDではないなど、機器的な問題が解決できなかった。エフエム仙台とも連携できて推進会議に参加していただけたが、NHKの参加を実現できなかったのは反省点である。

8. 効果と反省

キャンペーンの効果をどうやって測るのか。このような運動をする際には、その意義を知るためにも重要だろう。参加団体の関係者の受動喫煙防止の大切さについての認識が強まり、運動に対するモチベーションがあがった側面が浮かびあがる。一方、達成感の自己満足で終わらせてはいけなと自省したい。県民のアウェアネスがどれくらいあがったのか、知る手立てがあるだろうか。アンケートなどを企画すればよいかもしれないが、推進会議の議論には効果判定の視点が抜けていたように思う。議長を務めた筆者の落ち度だ。

受動喫煙防止を進める際に、注意すべき落とし穴の1つに分煙されるリスクがある。分煙では受動喫煙を防止できない。東北大学の喫煙対策を2010年に検討した際、受動喫煙防止の建前から分煙化の意見が出た。立派な喫煙所を作ればいい、という論理だった。丁寧に誤りを正したことで、2011年から今にいたるキャンパス内全面禁煙につながることができた。推進会議の今回のポスターに「受動喫煙は分煙では防止することはできません」と大きく一文が添えられている。そのような誤解が生じないようにする防波堤の役割を負わせたようなものだった。

おわりに

受動喫煙防止が進み、吸う場所が狭まれば、喫煙しない人が増える。推進会議が目指す本丸は、喫煙率を低下させることだ。本キャンペーンの効果を測る指標として、喫煙率の推移を注目すればよいのかもしれない。しかし、現状では、喫煙率低下を加速させ得るような広がりではない。イエローグリーンの意味を県民の誰もが知るようにしたい。推進会議が続けられる中で、賛同者を増やしていければ、目指すべき究極のゴールに近づけるのではないか。ゴール達成まで長引けば、それ

イエローグリーンキャンペーンについて

特集

だけ不幸を味わう人が増えることを忘れてはならない。来年度以降も、推進会議の継続を願っている。

末尾ながら、この場を借りて、キャンペーンに参加いただいた団体や個人の方々、および運営や事務作業を引き受けてくれた県医師会の事務局の方々へ深い感謝の意を表したい。

文 献

- 1) 作田学. イエローグリーンキャンペーンの意義について. 日本禁煙学会雑誌, 2023; 18: 119-121.
- 2) 佐世保市. イエローグリーンリボン運動～望まない受動喫煙をなくすために～. <https://www.city.sasebo.lg.jp/hokenhukusi/kenkou/judokitsuen.html>. (2025年10月4日閲覧)
- 3) イエローグリーンキャンペーン (ライトアップ活動) を実施しました. 宮医報, 931: 586-587, 2023.
- 4) いわき市. イエローグリーンリボンを作ってみましょう! <https://www.city.iwaki.lg.jp/www/contents/1591768916688/index.html>. (2025年10月4日閲覧)
- 5) 宮城県イエローグリーンキャンペーン推進会議. <http://www.doh.med.tohoku.ac.jp/miyagiig/index.html>. (2025年10月4日閲覧)
- 6) イエローグリーンキャンペーン宮城. <https://www.youtube.com/@イエローグリーンキャンペーン宮城-k4c>. (2025年10月4日閲覧)
- 7) 「イエローグリーンキャンペーン2024」を実施しました. 宮医報943: 656-664, 2024.
- 8) 安藤由紀子. 宮城県イエローグリーンキャンペーン2025に向けて. 宮医報951: 266-267, 2025.
- 9) 「イエローグリーンキャンペーン2025」を実施しました. 宮医報955: 616-624, 2025.